

TOP Interview

トップインタビュー

第12回

志田
文毅

復興庁福島復興局長

聞き手／矢吹光一

一般財団法人とうほう地域総合研究所理事長

福島と私の幸せ ～自利利他～

● 志田 文毅（しだ ふみたか）さん

田村市常葉町出身。安積高、東大法学部卒。

1994年、自治省（現総務省）入省。京都府総務部長、総務省政治資金適正化委員会事務局長などを歴任。

1. 志田局長の生い立ち

矢吹 ●本日は大変お忙しい中、お時間いただきましてありがとうございます。まず、官僚になられる動機というか、子どもの頃から官僚になるまでの歩みをお聞かせください。

志田 ●私は1971年に田村郡常葉町（現田村市常葉）に生まれました。矢吹理事長と同じ田村出身です。福島に対する想いが強まったのは、小学1年生の時にテレビで観た夏の甲子園の郡山北工業だったと記憶しています。その当時、福島県代表はまだ弱く、ほとんど1回戦負けでしたが、北工は初出場ながら初戦で名門の松山商業に勝ち、大人はみんな凄いと喜びましたが、2回戦の報徳学園には11対2と大敗しました。凄く悔しく、この時に地方の人間としての意地というかプライドが芽生え、子供心に福島の意地を見せたいと決意しました。

小学校の頃は漠然と「自分も将来何か役にたつ人になりたい」と思っていて、周りからは「将来は医者になったらどうだ」などと言われましたが、自分の位置や可能性がわかりませんでした。中学校ではそれがだんだん分かってきて、安積高校から東京大学に入れば、もっといろいろな将来の選択肢があるのではと思いました。

高校は希望通りに安積高校に進学し、2年生で文系・理系を選択する際に、東京大学法学部に行って官僚になると決めました。福島のような地方のため国全体の仕組みを変えるためには、官僚になって役所で自分の力を試し、地方の役に立ちたいという気持ちが強くなったからです。

2. 官僚生活のスタート

矢吹 ●そういった時を経て今に至るわけですね。私も田村に生まれ育ち、私は地銀に入り地域のために役に立ちたいと思いやってきました。福島・田村・常葉といった地方の現状をわかる中で、官僚人生をスタートされるわけですが、最初から自治省（現総務省）と決められていたのですか。

志田 ●漠然と自治省が地方自治に一番近いと思っていましたが、決め手となった要素は2つありました。まずは、公務員試験に合格し官庁訪問をしていた1993年に、戦後長らく続いたいわゆる「55年体制」の終了・政権交代という凄い出来事があったのですが、その少し前から元熊本県知事で地方出身の細川護熙首相のもと、地方分権が凄く盛り上がっていたことです。あとは、この年サッカーJリーグもスタートしたのですが、初代王者となった鹿島アントラーズの試合をテレビで観て感じたことです。チームが優勝して凄く盛り上がり、サポーターが「自分達の誇り、地域の誇り」として涙を流して喜んでいました。それを見て「自分の地域のアイデンティティはみんなを元気にさせることだ」と感じて、色々な省庁を回った中で「やっぱり自分のやりたいことは自治省だ」と第一志望にして何とか採用してもらえました。

矢吹 ●そこから1994年に官僚人生をスタートさせて、入る前から知っていること、知らないことがあると思うのですが、その中で実際に入省してつらかったことは何でしたか。

志田 ●つらかったことではありませんが、入省して3ヵ月本省で研修した後は、都道府県に出向し、その市町村課等にお世話になり、先輩や職場を見て、仕事のイロハを覚えるというのが総合職キャリア組の通る道でした。



私は滋賀県庁の市町村振興課にお世話になり、起案の仕方や会議室の予約の仕方といった、社会人としての基本的なことから教えていただきました。入省翌年の1995年1月に大津市の県独身寮で阪神・淡路大震災を経験し、大きな揺れの中で死を意識するなど人生観が変わる経験をしました。同年7月に東京に戻され、国土庁防災局震災対策課に出向しました。当時日本の防災体制を根本から見直す必要に迫られていて、大震災の応急対応のあと、次の巨大災害に備えた災害対策基本法の大改正を行う時期でした。

私の本当の意味での職業人生のはじまりが防災や危機管理に関する仕事であり、そこで防災

に関する仕組みを根本から変える法案作りを行い、国会審議の末席にも参加するなど、初めて霞が関の仕事をやったという達成感をえました。その後、自治省に戻り、財政局調整室という部署で、地方交付税や地方債などの地方財政措置を各省と折衝して調整し、全国の自治体が住民のため必要な事業を確実にできるようにする、という仕事を担当した後は、岡山市役所に出向し、市長の秘書や政策の企画・総合調整などをやりました。3年間働いた後東京に戻り、内閣官房で有事法制を担当する部署に配属されたのですが、自身の30年余りの公務員人生を振り返ると、国と地方を行き来し、国では、自治省入省時は想像していなかった防災や危機管理系の仕事が多くなりました。

内閣官房に着任した当時、万一敵国が我が国に侵攻してきた時、専守防衛の自衛隊が敵を迎え撃つということは自衛隊法などで決まっていたのですが、その時後方にいる一般国民がどうやって避難するのか、誰が移動の号令を出すのか、県境を越えるような広域避難の場合、車などは誰が用意するのか、といった具体的な仕組みはありませんでした。こういう国家存亡の危機には、国の総力を挙げて国民を守らなければならないのですが、その仕組みづくりのためには、国（中央政府）と地方公共団体の両方、内政全般がわかる総務省の自治系の人間が適任だろうということで、私が呼ばれたようです。

矢吹 ● 外敵が来た場合、私たちはどう行動したらいいかということは、ほぼ学んでいないような気がしますが、何かシミュレーションをされているのですか。

志田 ● もちろん、法律案を作るに当たっては、いろいろな事態を想定し、様々な角度から徹底的に議論しました。自衛隊から派遣されていた同僚たちと一緒に、図上演習なども繰り返しました。地震や台風などの自然災害の場合、まずは、現場に近い市町村が主体となって対応し、それが難しい大規模災害のときは都道府県や国が介入し支援する、という地元主導の仕組みです。一方、外敵からの武力攻撃の際には最初から、外交等を含めて事態の全体像が把握でき、専門的な知見も有する国が中心となる必要があります。国が音頭をとって都道府県や市町村を動かし、県境を越えるような広域避難や応援物資の受け入れなどを行います。この「国主導で危機対応に当たる」という仕組みは、原子力災害対策特別措置法でも採用されています。

3. 東日本大震災との関わり

矢吹 ● 東日本大震災の時にはどこにいらしたのですか。

志田 ● 東日本大震災の時は、北海道庁へ出向していました。日本がどうなるかわからない中で、防災・危機管理のプロを自任する自分が最前線に行けないことに歯ざしりしました。無念さを抱えながら、いま自分ができるところをやろうと、道庁の財政課長として、物資の送り込み、避難者の受け入れなど福島はじめ被災地を支援するための緊急の予算編成に没頭しました。

震災後の夏に東京に戻り、その後、国土庁防災局の後継組織である内閣府防災担当に異動となりました。東日本大震災という未曾有の複合災害を踏まえて、復興を進めながら、南海トラフ巨大地震など次の巨大災害に備える部署です。そこで災害対策基本法の大改正を担当しました。全力でやりました。この法律は1961年の制定後、巨大災害を教訓に2回大改正が行われましたが、1回目の阪神・淡路大震災、2回目の東日本大震災、両方に深く関わったのはおそらく私1人しかいないと思います。

今となっては笑い話ですが、原発事故後は「福島の人間として意地でも電気を使わない」と決意し、2011年の夏はエアコン無しで過ごしました。

矢吹 ● 震災当時、これから福島はどんなふうになるんだと不安を感じました。そこから今に至るまでには、地域の方々の献身的な努力、不撓不屈の精神があり、今日を創ってきたと思います。そういう中で、復興局長という立場になられて、今後の福島を復興局としてこんなふうにしていきたいというものはありますか。

志田 ● 私は去年の夏に福島に来て以来、浜通りを中心に、週の半分ほどは県内を回っています。多くの方々の苦労や努力があってここまでこられて、本当に感謝



しています。震災から14年経ち、ステージはだいぶ変わってきています。命が最優先でとにかく生き延びるというステージ、そこを何とか脱出して次のステージに移っています。時間が経っているからこそ、人や地域それぞれの差が大きくなっているように感じます。

今は普通の生活に戻った方もいますが、避難指示という公権力によってやむなく避難している方が今も2万人以上いる、という事実は重く受け止めなければなりません。復興が進んでいく中で、相当程度の住民の方が戻り、新たに他県から移住されている方もいるエリアがある一方、今なお人が住んでいないエリア、除去土壌の中間貯蔵施設となっているエリアがあるなど、地域差が広がっています。個人あるいは地域・市町村ごとにカスタマイズされた復興が大事になってきています。大熊町の大野駅西口など新しい街が開発された地域もある一方で、家族や友人と離れて避難生活を続けざるを得ない方もいます。こうしたつらい立場にある方々の心のケアを行いながら、新しい街づくりといったインフラ整備を図らなければ、県民全体として復興できたという気持ちにはなかなかならないのではないかと思います。

復興庁としてやれることは、予算を確保するとか事業を執行するとかいろいろありますが、一番は市町村や県庁といった地元行政機関、経済人の皆さん、農林水産業やサービス業など様々な分野で頑張っている

方々の裏方となることです。復興庁が主役になる必要は全くなく、サッカーに例えれば、パスを出してゴールをアシストすることや、泥臭く身体を張ってピンチを防ぐことです。とにかく福島の復興が一日でも早く成し遂げられたらそれで良い。それに尽きると思います。

4. 福島に来てみて

矢吹 ●地域、企業、人によってそれぞれに応じた対応をしていただきありがとうございます。引き続き私たちへの力添えをお願いします。私は東京電力福島第一原発に年何度か皆様をご案内するのですが、「自分たちはどんな存在なのか？自分たちの幸せとは何だろうか？来し方や行く末は？」など哲学的なことを非常に感じる場所かとも思います。そういったところを、まずは来て見ていただく、いろいろなものを感じて、知っていただきたいなと思っています。

志田 ●実際にいろいろなものを、その土地の空気を感じながら見ていただくことに意味があります。福島のことを腫物に触るようにかわりそうと言ってもらうのではなく、来てみたうえで、自分のところとは違うのかな、実は結構良くなっているなとかリアルに感じて、これからも福島とつながってもらえたらいいなと思います。

矢吹 ●私はかつて復興庁も共催されていた田村市産業人材育成塾の塾長を務めさせていただいておりまして、今年2月に第9期生が卒業しました。私は第6期からお付き合いをさせていただいて、田村にはこういう人材がいるのだということがわかり、これからの未来を期待しております。東京から見る地方と地方にいて見る見方は必ずしも同じではないと思うのですが、福島に戻られて、東京から見ていた福島と、ここに来てみたら違ったというのはありますか。

志田 ●私は田村で生まれ育ち東京の大学に進学しましたが、地元があったからこそ東京やその他の土地で色々な視点を広げることができ、とても意味があったと思います。福島と東京にはそれぞれの良さがあります。良い面もあれば悪い面もあるし、加えて都会と地方とは持ち味が違うと思います。福島市に住むのは初めてですが、東京出張の折に都内の自宅に行き、福島駅に帰ってきた時、何かほっとして居心地がいいんです。子どものころは正直、都会でも田舎でもない中途半端な県だなと思っていましたが、同じ季節にスキーもサーフィンも楽しめる、多様で味わい深い県だと思います。年齢を重ねるにつれてその味わいが分かってきました。もちろん東京にも刺激ある街が集まっていたり、下町の人情があったり多くの魅力があります。それぞれの良さを都市と地方が出し合いながら、苦手なところはそれを補う何かを出して、何とか1つの日本という社会として、共存共栄できないかなと思っています。私はそれを「自利利他」と言っているのですが、そういう社会を両立することや、他人の幸せのために何かやるのが自分のための幸せにもなると思います。総務省が所管する地方交付税の制度も、都会と地方が共存共栄できる社会をつくるという発想から出ています。日本という国全体で支え合い、みんなの幸せを追求することを実践するのが官僚の役割です。それを目指して私は自治官僚になりました。でも今、きつい仕事が割に合わないように見えて官僚の人气が下がっています。国全体や地方のために役立つことができ、いろいろな経験ができますので、官僚になりたいという子どもが増えれば嬉しいなと思います。

5. 福島に対する想い

矢吹 ● 福島から離れて都会で成功を収める人、福島に戻りたいと思っている人、絶対に戻ってきたくない人、いろいろいらっしゃるかと思います。志田局長は福島を離れておられますが、福島に対する想いをお聞かせください。

志田 ● 福島県を離れたきり戻ってこないというのは、地方の過疎問題の典型です。でも、都会に出て住民票は福島県には無いが、ずっと福島県人のアイデンティティを持ち続ける人がいると思いますし私はその1人であると自負してきました。そういう準会員みたいな立場で地域の意思形成に参加できるような住民制度ができないかと、国のレベルでもいま真面目に議論されています。その簡易版という存在がふるさと納税です。カタログギフトなどと揶揄する声もありますが、元々は、住民でなくとも自分の育った地域、親の住んでいる地域に関わりたい、その地域にお金を出したいというのが、ふるさと納税制度の本質です。



矢吹 ● 関わり続けておられる人は福島県出身の企業経営者にもたくさんいらっしゃいます。一定の名を成して会社の中でポジションが定まると気持ちに余裕ができて、福島県に関わりたいという気持ちが高まるのだと思います。

志田 ● 昨年亡くなった俳優の西田敏行さんやクリエイティブディレクターの箭内道彦さんなどがまさにそうだと思うのですが、住民票が無いから福島県から出て行った人、ではなく、バリバリの福島県人だと思います。本当に福島を愛している。そのほかにも、実際福島に住んでいなくても、交流人口と言われる、福島に関わっている方はたくさんいます。

6. 住民帰還について

矢吹 ● 住民帰還に関して、子どもの教育とか、その人なりの様々な事情があって帰ることが出来ないという方もいらっしゃいますね。

志田 ● 例えば、ある町に住んでいた3世代同居家族が町外に避難することになった。その後祖父祖母2人だけが元の家に戻り、父母は、子どもの教育のため、子どもと一緒に元の家から車で20分の隣町に住むことにした、という家庭があるとします。これを「元の町に戻っていない」とみるべきなのか、「近所にいる」とみるべきなのか。ご本人たち、特に若い世代の気持ちを想像すると、戻ってきたと言ってもいいのでは私だと思います。ご年配の方々の寂しさや不安は想像できますし、世代間で受け止め方に違いがあるかもしれませんが、各家庭の事情を踏まえてどういう選択をするのか。それはご本人たちの考え方・生き方の問題なので、無理やり住民票を元の町に戻せとか、元どおり3世代同居しろというのは、福島に限らず地方の目指すべき方向として違うのではないかなと思うんですよ。若い世代に「戻ってこい」と圧をかけてしまうと、息苦しさを感

じて、かえって東京などの都会に残ってしまう。それよりは、程よい距離感の隣町にいる。近くにいるだけで、満点じゃなくてもそれはそれで良いのではないかと思います。そういう形から帰還をはじめていけば実は、若い世代は戻りやすいのではないかと。地方創生もそうですけど、「これはこうじゃなければならない」と固定的に考えず、懐深く、様々な生き方・暮らし方を認め合う。そういうほうがいいのではないのでしょうか。

7. 今後やりたいこと

矢吹 ●川内村では「都会で1人親が子どもを育てられないから、ここに来れば村が育てるんだ」と言って、地域で育て上げるということをやっています。福島の良いのひとつに地域をあげて自分事として捉え、困っていると言っている人がいれば、見て見ぬふりをできないというのがあってと思います。そういった意味で復興局長がこれからやりたいことは何でしょうか。

志田 ●50代も半ばになり、私の公務員人生も終盤になってきている中で、福島の復興に関わる仕事ができ幸せに思っています。私の在任中に復興を完成させるのは難しいかもしれませんが、何とか道筋をつけて前に進ませたいと思います。東京電力福島第一原発の事故の時、国民を守るための最後の切り札として、東京消防庁が原子炉への放水に赴きましたけれど、私も総務省消防庁 OB として北海道から仲間のような気持ちで見守っていました。その時私は「放水が上手くいって日本・福島の壊滅を止めることができるのならば、自分の残りの公務員人生を福島の復興に捧げます」と SNS に書いたんですよ。その SNS をどれだけの人が見てくれていたのかわかりませんが、自分で言った以上はやらなければならない。ようやく14年遅れてやらせてもらうことができました。私の公務員人生でやってきたことを全部つぎ込める仕事かなと思っていますので、私の在任期間中に1人でも多くの県民が「何か復興に近づいてきているな」と実感していただけるよう、裏方で一生懸命やろうと思っています。

福島復興局には多くの職員が出向してきていますが、彼らはいつか元の役所に戻ることになります。この福島で喜怒哀楽をともにして一緒に頑張った経験を元の役所で活かして、いつかそれを日本や世界のために役立ててくれたらいいなと思っています。

矢吹 ●県内には震災以降、中央官庁から出向してきている方がたくさんいらっしゃいます。いろいろな行政の方とお話していると、若い人たちにも課題認識を持っていろいろ取り組んでおられる行政マンの方が多いことがわかります。行政も若い人の育成が大切ですね。

志田 ●次の世代を育てて引き継いでいくというのは大事です。野球やサッカーでも新人は、最初ミスしてもずっと使い続けなければ育ちません。私は北海道で日本ハムファイターズのファンになりましたが、新庄監督は就任後2年間は最下位でした。その間我慢をして選手を色々なポジションで起用し適性を見ていたと思うんですよ。それで3年目に結果を出しています。役所もそうやって人を育てていかなければなりません。どこから助っ人と呼んでくるばかりではなく、生え抜きの選手も育てて魅力あるチームを作るということは、野球やサッカーと行政マンも同じです。

矢吹 ●本日はお時間いただきましてありがとうございました。

● インタビューを終えて ●

非常に冷静で実務遂行能力の高い官僚というイメージを勝手に抱いていたが、その実は、熱いハートを持った地方創生、復興支援に全身全霊を尽くす福島県田村市出身の志高き行政マンであった。私どもの脈絡のない質問に対して、ひとつひとつしっかりと考え、丁寧に分かり易くお答え頂いた。目をしっかりと見て誠実にお話し下さるのは、そのお人柄の表れである。経歴をお伺いすると、一貫して防災畑を歩んでこられ、「防災のプロ」としてのご経験が、当地福島の復興を支えて頂けることは大変心強い限りである。

田村市常葉町に生まれ、東京大学を経て総務官僚になられた。いつの時も想うのは、地域であり、人である。その根底には、ふるさと福島の前風景がある。東日本大震災時に SNS で「東京消防庁の対応により、福島第一原子力発電所の消火活動がうまくいって原発の暴走を止めることができたならば、残りの公務員人生を福島の復興に捧げる」と発信したとのお話しは、まさに人となりを象徴するエピソードであり、お聞きしていて心に溢れるものを止めることが出来なかった。熱き官僚の心意気、矜持に心から敬意を表する次第である。そのような沢山の方々の献身的なご努力により、今日の生活が成り立っていることを、我々は決して忘れてはならない。

「私たちは何のために仕事をするのか？誰のために働くのか？」私自身、いつも心に問いかけている。過日、京都大学経営管理大学院で「福島の復興と事業再生」について、少し講義をさせていただいた。そこで改めて感じたことは「我々の東日本大震災時の取組みは、これからの日本にとって、とても大事なナレッジであり、我々は生かされたものとして、後世のためにしっかりと知見を残し、共有していかなければならない」ということである。我々の経験は、これからの様々な困難や変化の激しい時代を乗り越えるヒントに溢れている。

今、我々に求められているのは、「変革と挑戦」であり、見えないものとの闘いである。当地の子供達の未来のために、沢山の心ある方々と繋がりネットワークを強化し、ともに力を合わせて、これからも歩を進めてまいりたい。

志田局長、どうぞ引き続き宜しくお願い申し上げます。

(インタビュー 矢吹 光一)



志田文毅局長(左) 矢吹理事長(右)